

# 令和2年度 第2回徳島県総合教育会議 議事録

日時：令和2年12月23日（水）11:00～12:05

場所：徳島グランヴィリオホテル

1階ヴィリオルーム

## 1 開会

（司会進行）

＜佐々木副部長＞

ただいまから、令和2年度第2回「徳島県総合教育会議」を開催いたします。

本来でありますと、ご出席いただいております皆様方をご紹介させていただくところでございますが、時間の都合によりまして、別添の名簿と配席図でのご紹介とさせていただきます。

それでは、まずはじめに、飯泉知事よりご挨拶を申し上げます。

（あいさつ）

＜飯泉知事＞

本日は、第2回目となります徳島県総合教育会議を開催いたしましたところ、各教育委員の皆様方におかれましては、大変お忙しい中、ご出席を賜り誠にありがとうございます。

まず、何点か新しい話題の提供をさせていただければと思います。

このたび、令和3年度国の予算案が定まったところであります。この中で、文教関係の予算の筆頭に出てくるのは、「コロナ時代」ということがあるわけではあります。が、「新しい教育体制」、こうしたものを整備をしていく。そうした意味での新しい教育に向けての教育環境の整備、こうしたものが「新しい時代における教育環境の整備」という言葉の中に盛り込まれたところであります。では、「これは一体何なのか」ということであります。この中には二つ、まったく新しいものが出てくるところであります。まず一つ、新しい話題からいきますと、こちらは40年ぶりとなる「教職員定数の改定」、これが盛り込まれたところであります。それは何か。ちょうど12月14日、「国と地方の協議の場」、私をはじめとする地方6団体の代表と、総理はじめ関係閣僚との協議が持たれました。この中で実は、今回まず、小学校1年生は「35人以下学級」、順次これを年次進行する、このように定められていたところであります。が、今どうなっているのか。定数上は、1年生だけが「35人以下学級」、2年生から中学3年生までは「40人学級」と定められていたんですね。しかし、現場の先生方から見ると、「いや、35人以下学級が進んでいるところがありますよ」と。それもそのはずです。じゃあ、2年生以降はどうしているのか。本来であれば、特色ある教育を行うための「加配」を使って35人以下学級にして

いるんですね。つまり、日本の教育の体制というのは、正式な形では、35人以下学級は1年生だけ。あとは、加配によってそれぞれで行うという歪な状況が40年間続いてきているところでもあります。

そこで、今回のコロナ時代、仮に「40人だ」ということでありますと、「ソーシャルディスタンス」、各教室でこれを保つことができないところとなります。最低でも35人以下学級にしなければ、今、国の定める「新しい生活様式」、これを小学校で実現するのは不可能ということになるところでもあります。こちらについては、義務教育の現場であります、市または町村、市長会、町村会、それぞれの議長会からも、「とにかくいくら言っても実現をしない。何とか知事会としても協力してもらえないだろうか」ということで、この点については、自民党、公明党のそれぞれの与党の皆様方へ、そして、もうこれでもなかなか落ちが明かないということで、12月14日、「国と地方の協議の場」で、最初に私の方から総理に直接「35人以下学級を今、行わなければ」ということを申し上げたところでもあります。結果として、その後、二度、官邸の方から文科大臣と、そして財務大臣の協議が行われてもゼロ回答だったものが、今回、40年ぶりの定数改定となる「35人以下学級」を小学校6年生まで順次、年次進行する。つまり、これによって加配が浮いてくることとなり、様々な特色ある教育をここに行うことができるようになります。そして、昨日、ちょうど萩生田大臣とも協議をさせていただきまして、今後の方向性などについても定めをさせてきていただいたところでもあります。

もう一つは、言うまでもなく「GIGAスクール構想」であります。こちらについても、OECD諸国の中で、日本以外は1人1台端末。しかし、日本は3人に1台端末で一番遅れている国になってしまった。そこで、これを昨年度、文科省が何度も補正予算で財務省に要求したところ、すべてゼロ回答となり、昨年11月、総理大臣官邸で行われました「政府主催の全国知事会議」で、私の方から当時の安部総理に「これは今こそやらなければ」と、当時はもちろんコロナ禍ということとは全くわかっていなかったところではありますが、これに対し、安倍総理がその後の補正を加える形で4千5百億、義務教育の小中学校に対し1人1台端末、これが実現をすることとなります。そして、具体的に進めようとしたところ、年が明け、コロナ禍となり、これがまさに「学びの保障」、こちらにつながってくることとなります。

となつてまいりますと、当然のことながら徳島として、「義務教育、しかも公立だけでいいのか」ということになりまして、この点については、小中はもとよりのこと、高等学校、あるいは特別支援学校高等部を含め公私を問わず、こちらを整備させていただき、その財源については、これも全国知事会が提言をしてできあがった「地方創生臨時交付金」、これを活用をして、今回、日本で唯一の高等学校まで公私を問わず、特別支援学校高等部も含める形での1人1台端末ということで、今回、文科省の予算の中にも示されたように、この「GIGAスクール構想」、その体制をハードのみならずソフトも、あるいは指導態勢、これをどうしていくのか。まさに新しい時代の教育環境、その整備が整い、その具現化を図っていく令和3年度とな

ったところであります。

そして、もう一つ。文科省は来年の春から特別支援学校、こちらの学校の設置基準、今までは作られていなかった。しかし、今では「ダイバーシティ」という言葉もSDGsの中にしっかりと組み込まれる中で、2030年までに、世界中はこのダイバーシティを実現をしていかなければならないということになりますと、当然のことながら、特別支援学校の設置基準をしっかりと定める必要があり、また、社会においても、「特別支援学校の在り方」が大きく認知をされるようになり、子どもさんたちの特性という形で、多くの皆様方がこちらを選ぶ選択の対象となり、そして多くの皆様方がここにお出でになるということになりますと、とてもとても今の状況では、快適な教育環境ということとは程遠い現状となるわけでありまして、徳島県としてはまず、地域一体型のキャリア教育を推進をしていく「みなと高等学園」、これとともに、国府支援学校をまさに「ダイバーシティの大きな拠点」として整備をしていく必要がある。ハード、ソフト両面からということで、いよいよ基本・実施設計に着手するところであります。

本来ですと、まだまだ多くの分野があるわけでありましたが、ここからは、教育委員の皆様方に積極的にご提言、ご発言をいただきまして、まさに令和3年度、日本自体が「新しい時代における教育の環境整備」に邁進をしていく。こうなりますと、ハードのみならずソフト面、あるいは指導法などについても、今後はしっかりと確立をしなければいけない。そして、「加配定数の行方」といったものも、我々としての知恵の絞りどころとなりますので、今、申し上げた環境といったものを是非ご理解いただき、大所高所からご提言賜りますよう、よろしくお願いを申し上げます、私からのまず冒頭のご挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いをいたします。

#### <佐々木副部長>

それでは議事に移ってまいります。これからの議事進行につきましては、飯泉知事によりしくお願いをいたします。

## 2 議事

(進行)

### <飯泉知事>

それでは、次第に従いまして、順次、進めさせていただきます。

まずは事務局から、「WITHコロナ時代における教育施策の展開について」を説明させていただきます。その後、皆様方との意見交換に移りたいと存じます。それでは、事務局から説明をよろしくお願いをいたします。

#### (1) WITHコロナ時代における教育施策の推進について

(事務局より「資料1」により概要説明)

## (2) 意見交換

### <飯泉知事>

それでは、これから各委員の皆様方からご発言をいただきたいと思います。

それでは、まず、三木委員さん、よろしくお願いいたします。

### <三木委員>

失礼いたします。委員に任命していただきまして、もうすぐ2か月になるところなんですけれども、私、この教育委員をやらせていただいて、本当にこの2か月で、私自身の価値観も激変するぐらい、すごくいろんなことを教えていただける期間になっております。

私自身が「伝統芸能」という世界に身をおいて、ずっとやってきておりまして、私のいた世界では「変わらないことの価値観」ということをすごく大事にしております。江戸時代の習得方法そのまま、「習得方法自体も大事だ」ということをすごく言われて、便利さは、「便利な芸になる。不便な中でも培われたその過程でこそ得られるものを大事にきなさい」というようなことを、ずっと言われてきたこともありまして、最近のこの機械のICTのことについても、「どうしても気持ちが付いていけない」ということがすごくありまして、委員になってからも、教育長さんにもその話もさせていただいたりしてたんですけれども、この2か月、いろんなことを見せていただいて、聞かせていただく中で、「これではいけないんだ」と思えるようになってまいりました。

この間、視察に行かせていただいた高志小学校も、私にとっては、本当に衝撃的で、子どもたちみんなが楽しそうに取り組んでいることを、「素晴らしいな」と思うのと、あと、高志小学校でいただいたパンフレットの中に、「こういうことを誰が阻んでいるか」というような一文がありまして、「私みたいな考えを持った人間が、推進を阻んでしまっているのかもしれない」と思うぐらいに、ちょっと反省し、「怖がるのが罪かな」と思うようになってまいりました。「百聞は一見にしかず」ということもあります。これから、子どもたちは大人より柔軟なので、どんどんやっていっても付いていけると思うんですけれども、先生方の中には、きっと私のような、なかなか付いていけない方もいらっしゃるのではないかなと思うんです。ちょっと子どもたちから離れてしまうんですけれども、その付いていけない先生方の気持ちを、ダメと決めつけずに、ほぐして、そっちの方に一緒に導いていくということも一つ課題になっていくのではないかなと思いました。

「怖がるのが罪と思うようになった」という面もあるんですけど、一方で、このタブレットで簡単にやることによって、「簡単にわかった気になってしまうという怖さもあるな」とやはり思うんです。この間、リモートでずっと芸を勉強していたという方の芸を見せていただいたことがあるんですね。そのリモートでばっかりやった方の演奏を聞かせていただいた時の「違和感、恐怖感」。「恐怖」とは言い過ぎ

かもしれないんですけども、「呼吸」が感じられなかったんです。すごく上手で、すごくカッコよくて立派だったんですけども、一番私達が大事にしている「呼吸」というか「息」というか、そういったものが抜けてしまっている「演奏だな」というのを感じたことがありました。教育の現場でも、「人の皮膚感とか温かさ、呼吸というものでしか伝わらないもの」というのが絶対あると思います。この間、「何ができて、何がだめかというのを、今、見極めている最中だ」というお話を伺っておりますので、それを全く考えずにということはないと思うんですけども、「人と人との触れ合い、空気感、呼吸」、そういったものでしか伝えられないものがあるということを見落とさずに、どうぞこれからもやっていただけたらなと思います。

そして、「タブレットも道具の一つだ」という文章があったんですけども、「なるほど」と思いました。何でも習得するのは大変ですが、タブレットも習得するまでにはいろいろな過程を経ていく一つの道具だと思えば、この習得の過程でもやはり得られるものはたくさんあって、その習得次第で、いかようにも便利にしていけるということなので、そうすると本当に世界が広がっていくので、「これからの日本を背負っていく子どもたちにとって素晴らしい環境だな」というのを改めて思いました。あまり実のある話ではないですけども、どうぞこれからも一緒に私も勉強させていただきたいと思ってますので、よろしくお願いたします。

#### <飯泉知事>

はい、ありがとうございます。ただ今、三木委員さんの言われたことは、この「アナログからデジタル化へ」といった中で、非常に重要な本質のところを突かれていますね。私は郵政省時代もそうなんですけど、この世界をつくりあげてきた中なんですけど、例えばレコード、これはアナログの代表なんです。それがCDが出た時にほとんど死滅をしてしまいました。で、ほとんどの人が「CD、これはいい」となったんです。しかし、これになったことによって、今、言われた「呼吸」、あるいは、人間の耳に聞こえていないけど重要な音域を切ってしまったんです。これによって「多くの演奏家が演奏生命を失われた」とまで言われてしまった。そこで出てきたのが「ハイレゾ」なんです。またレコードの時代に戻ろうと。でも、なかなかここは元に戻ったのではなくて、特別の形でその「切る道」を変えようということになって出てきた。じゃあデジタル化がみんな悪かったのかというと、そうではなくて、音楽をCDを買わなければ、あるいは、売ってない国の人達もみんなが聞けるようになった、「iPod」ですね。という形で、アナログからデジタル化へ。そして、デジタル化のマイナスの点を新たに補いながら、しかし世界普及をしていく。こういう形に今なっているということになりますので、このタブレット型端末というのもまさにその意味のところとなり、今、コロナ時代となつては、やはりこれを活用していく。ただし、これを神様と思つてはいけなくて、今、出てきたように、あくまでもツールの一つ。で、これによって関心を持って、「そのうちやりたいな」というときには、やはりこれは「GIGA」で、そして、場合に

よっては「アナログの世界」で学んでいかなければ、「本当の意味での芸術家にはなれない」ということになりますので、今、おっしゃられたところは、まさにその本質を突かれたと。

で、我々、この世界を築き上げていく者としては、やはりそこもしっかりわかった上で、その使い方を誤ってはいけない。「何となくデジタルの暗号とすぐ思い込んでしまう」、ここに大きな誤りがありますので、是非我々としても、そのアナログのぬくもり、そしてその必要性といったものを、デジタル時代に入っても、「じゃあ、どういう形でそれを具現化していくのか」、このところをきっちりと築き上げていければと思います。どうもありがとうございます。

それでは次に、島委員さん、よろしくお願いします。

### <島委員>

お時間いただきましてありがとうございます。いろいろ申し上げたいことをまとめてるうちに、ちょっとスライドにした方が伝わるのではと思ひまして、スライドにまとめさせていただきました。私もまだ、委員になって半年ですので、間違っている部分もたくさんあるかと思いますが、この半年間の間で、ちょっと感じていることをまとめてみました。教育行政をつかさどっている皆さんは、いろいろ頑張っておられまして、本当に私も敬意を表しております。込み入ったことをちょっとお話しさせていただこうと思っています。3分で終わるように。

やはりどんな組織でも、育成と採用はすごく大事だと思っていますので、教育振興計画とかICT教育の推進とかは、若い先生方の声というのを合わせてやっていたらどうかということで、よく変化に強いのは「ボトムアップ」であり、「現場支援型組織」だと言います。教育に置き換えると、やはり「現場の先生方をどう組織として支えるか」、そして、「児童生徒にとっていいものをどう提案するか」だと思います。最近「教頭先生を志望される方が減っている」という話ですけど、富樫先生ということでよろしかったでしょうか、榊教育長に「管理職になったり、教育委員会の事務局職員への道だったり、そういう立場になるとできることも多いよ」と諭されたとのこと。やはり管理職になっていかれる方が出てこないといけないと思うので、こういう若手が全体を考える機会を増やしていく。既にやっておられるかもしれませんが。

次に、採用についても、我々もいろいろ面接に関わらせていただきまして、素晴らしい方がたくさん受けていただいていると思いますが、やはり、教育大綱、教育振興計画に基づき、その実践に必要な人材を採るべきだと思います。我々世代、私は45才ですけど、教員になるのは、めちゃくちゃ厳しかったんですね。教育課程を出ていない方が多いんです。だから、社会人で大卒後に教員になりたくなかった方が、教員免許の取りやすい環境も必要でしょうし、昨日も小林委員からご提案がありましたが、「新卒者等、経験年数の長い臨時教員というのは、ちょっと採用基準なども変えてやってみてはいかがか」ということですね。平等性は必要だと思いますが。

あとは、「スペシャリストの登用」そういった方の活用をどうするかも大事と思いました。

次に、「GIGAスクール構想」。この前、高志小学校さんに視察に行かせていただいて、「大変素晴らしいな」と思いました。もう素晴らしすぎて、こうやってネットにも出ていた映像を、うちの社内でも共有してます。「藍のマスク」をインターネットで売っておられますし、お子さんたちご自身で作られてるっていうことでしたね。「非常に今の小学校は進んでるね」と、うちの社内でも共有したぐらいです。

英語については、やはりコミュニケーションができてこそなので、この方はスリランカの方ですけどね、ほとんどの方は英語がしゃべれますので。今は本当に使える英語にしていかなければいけないなということですよ。

また、地方創生はすごく力が入っていると感じていますが、やはり質の良い雇用を我々経営者が提供できないと、みんな県外へ出ていってしまいますので。農業とかもすごく徳島は頑張っておられます。農業やってる若者が最近多いんですよ。でも年収400万円ぐらい払えるような質の高いもの、フランスのボルドーとか地方のワインみたいに、そういったものを作っていかなかったら、「ほら皆出ていくでよ」ということですね。「教育も頑張っているから、やっぱり受入れ側の我々も頑張らないといかん」ということを、いろいろ経営者関係の代表もやっていますので、そういう話もしています。

そして、先生方の「働き方改革」の話もよく出てくるのですが、部活については、本当にとっても難しい話だなと思ってます。この前のヴォルティスの社長さんに会社に来ていただいたことがあり、サッカー界では高校生世代の民間のトップチームと高校のトップチームの実力が拮抗していると聞き、民間では、いろいろな仕組みがすごい進んでいると思いました。この辺はまだまだ、私もちょっと知見があるわけじゃありませんのでね。

最後に、発達障害などですね。最近、発達障害をもった社員の中には、大人になりそれが分かったという例が増えております。早期のうちに適切な介入があると、もっといい学校選びだったり、職場選びもひょっとしたらできたかなという方もいらっしゃると思いますので、ここは本当に「若いうちからの適切な関わり」というのが大事なんだということを感じております。以上でございます。

### <飯泉知事>

どうもありがとうございました。非常に分かりやすく解説いただいたところでありまして、やはりどの職場もそうなんですけど、若い皆さん方、あるいは次のチャレンジとしてその職場を選びたいと。そうした魅力のある職場に「教育の世界」というのも変えていかなければいけない。冒頭で申し上げた「教職員定数の改善」といったのも、そういったところでもありますし、ただそうなってくると、もう一つ出てくるのは「教育の世界」、これをもっとオープンにしていかなければいけないということなんです。つまり、どんな皆さん方も、教育に憧れてそこで教べんを執り

たいと、そういう人達が入ってきて「違和感を感じる」というのはまずいと。先ほどクラブ活動のお話もありましたが、こうしたところも、場合によってはどんどんアウトソーシングをしていって、そして「できる」といったものをどうつくるのか。サッカーの場合もそうですね。例えば市立船橋高校と、徳島ヴォルティスU-15、U-18、こうしたものが、それぞれ選手権を戦い合っていくということで、そういうクラブスポーツに入っても構わないし、学校でやっていっても構わないし、それぞれに指導者がまた違う世界の人達がいます。非常に多様性・ダイバーシティが進んでいるのがサッカー界ということになるんですね。

ということで、今、島委員さんからおっしゃられた点については、やはり教育委員会全体として、「教育界の在り方」、こうしたものについて、もう一度今、考え直すいい機会をおっしゃっていただいたのではないかと思いますので、この点については、榊教育長さんをはじめ、教育委員会の中で、そこでなかなか難しいのであれば、今回のように、我々、全国知事会としても文科省とともにですね、「新しい教育、新しい時代の教育」、これを築き上げていく、まさにそうした呼び込む場を、今回は一本当たったところであります。これをどう活かしていくのか、ここにかかってくると思いますのでね、この点をよろしくお願い申し上げたいと思います。

それでは次に、菊池委員さん、よろしくお願いいたします。

#### <菊池委員>

よろしくお願いいたします。先ほどお話があったように、「GIGAスクール構想」ということで、高志小学校さんにお邪魔させていただいて、私も非常に感激したということがありました。ただ当然、このコロナ禍の中で制限されて、生活であったり、学業の中でも「かなり制限されている部分が多くあるんじゃないかな」ということと、「体力面」でですね、当然、基礎体力等々、全国平均と比べると、多分、徳島は真ん中ぐらいにはいたのではないかなと思うんですけれども。ただ、全国的にも「どんどんどん落ちていっている」という流れがあると思うので、こういった「GIGAスクール構想」の中で、モデル校として、今8校の学校が取り組んでおりますけれども、「体力向上」の部分でも、その「モデル校的なもの」がつくれて、それを「モデル校に格上げ」させていただいて、目標とするような学校づくりというのをさせていただいたらどうかなと思っております。

当然、コロナにかかる、かからないかというのは、体力だけでなく、心であったり、いろんな生活環境であったりという部分もあると思うんですけれども、「体力づくりをする」ということ自身によって、「かかりにくくなる体」であったり、「ストレス発散」であったり、そういったことが付いてくるのではないかと思いますから、当然、「GIGAスクール構想」が、このまま素晴らしい方向に進んでいくと思うんですけれども、「子ども達の心身の体力づくり」という、その部分をもう一度改めて考えていただけたらなと思っております。



### <飯泉知事>

はい、ありがとうございます。実は、ここは、体育協会の会長としては、今のお話、非常に有難いのと、痛い部分でありましてね。国体順位をどうやって上げてくのか。やはり、選手の段階で上げようとしても、なかなか難しいですね。今、菊池委員さんがおっしゃったように、やっぱり子どもさんのうちから体力増強といえますか、徳島の場合、小児肥満が多いと。これが後々に「糖尿病予備軍」となりますし、逆に言うと、「運動が苦手」ということにもなってしまいうんですよね。

ということで、今おっしゃるように、確かに今、我々も高等学校で「スポーツの指定校」なんていうことはやってきているんですけども、もっと前段階から、サッカーで言ったら、そのトップチームだけに力を入れるのではなくて、やっぱりユースの段階から、ユースじゃなくて、そこへ行く子どもさん達から育てていくと、こうした点についての仕組みというのを、いよいよ徳島、あるいは日本としても、考えていく時にきたのではないかと考えておりますので、この点についても、榊教育長さん、今後、新たなかたち、これは「義務教育の世界」となってきますのでね、お考えをいただければと思います。ありがとうございます。

それでは次に、河口委員さん、お願いいたします。

### <河口委員>

河口でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。私も5月からオンライン、遠隔授業を実施いたしました。最初は一体どのようにしたらいいのか、全くわからない状況だったのですが、10回ほど授業をいたしまして、その中で、「こういうふうにしたら学生にもよくわかるんだな」と非常に勉強になりました。

その後、数回、対面授業をし、「遠隔授業と対面授業とではどちらがいいか」と学生に聞いてみました。私は担当が音楽ですから、やはり対面授業の方が、「呼吸」、「息」「一体感」、そういったものが味わえるということでした。

ですが、遠隔は遠隔で、それぞれの想いを書き込んだものを画面で共有できるといった意味では「すごく良かった」といった学生の感想がありました。

今回、「GIGAスクール」ということで、高志小学校の授業を参観させていただいたのですが、子どもたちの生き生きとした姿、そして、先生がその授業の中で、タブレットをどういうふうに使っているか、本当に素晴らしかったです。指定校として研究されている学校だからこそできているし、校長先生のリーダーシップが素晴らしいため、素晴らしい授業ができると。「タブレットを使うことのみで終わらせてしまうような授業では、子どもの教育はできない」と感じておりましたが、高志小学校をはじめモデル校の「授業の在り方」をしっかりと発信していただいて、どの学校も、タブレットを使った授業によって養われる学力、姿勢、モチベーションを育て、県下の学校が格差のない取組みをしていただければと思います。そして、中学校に進級しても、同じような授業の在り方をお願いできればと思います。先日、総合教育センターから資料をいただきました。資料も大変素晴らしいものでしたの

で、しっかりと県内に発信していただきたい。また、教員の加配があるのならば、校内の組織を強化して組んでいったらどうかなと思いました。

しかし、どうしても教育として揺るがれない部分があると思います。教員としての「ぬくもり、温かみ」、そういった「教師と子どものつながり」、そういったものがすごく大事ですので、そういったことと、タブレットを上手く組み合わせながら、徳島県の子どもたちに教育をしていただきたいなというのが一つの大きな大きな願いです。

2点目は、やはりこういうふうな状況の中であるので、やはり小・中・高・大学が連携する必要があると思います。それと地域。コミュニティスクールがだんだん増えていますが、非常に良いことだと思います。本大学も学校現場の学習支援、学校現場にサポートをさせていただいております。そういった学生が将来の徳島の教育を担う、教員を目指すようなシステムができていきつつあるので、連携・協働体制、そういったものを深めていただいて、両立させていただけたら、さらに、徳島の教育が推進されるのではないかなと思っています。

3点目です。昨日の定例教育委員会会議の中で、「不登校」の問題が出ておりますけれども、この「GIGAスクール構想」の中で、そういう不登校生に支援するシステムができています。これは本当に非常にいいことだと思います。不登校生が増えている状況の中で手厚い「誰一人として取り残さない教育」という視点から、こういった「不登校児童生徒の学び支援検討部会」を立ち上げていただいて、この遠隔授業というものをしっかりと活用して、子ども達一人一人に手厚いサポートができるようにしていただけたらと思います。

そして、このような現状の中、やはりこの「つながり」という言葉が今、非常に大事になってきているのではないかなと思います。この言葉を大切にして、徳島の子どもたちの教育のために、しっかりと頑張って、現場の先生をサポートしていただければと思っています。以上です。

#### <飯泉知事>

ありがとうございました。実は今、河口委員さんが言われた1人1台タブレット型端末、これをどう使いこなしていくのか。これは実は、学校の先生方が見たサイドの話なんですね。つまり、生徒の見る目はまた違う。で、実は、我々はこれを一度経験しているんですね。学校現場にパソコンを入れる「パソコン教育」。もういまだに「パソコン教育」なんていう言葉を言う人はいなくなっちゃったんですけどね。

「情報化教育」とか。このときに実は大問題になったんですね。つまり、学校の先生で教えられる人がほとんどいない。「どうやってこれを教えるんだ」という話があって、それもでも結局「習うより慣れろ」で、「生徒から学んだらいいじゃない」と。ただ、先生はその使い道を指導すればいいので、「どうこれをやるか」ということを、そんなところに入っていたら、たまらないですよ。それをデジタル時代でない世代の人達が一から勉強する。ただでさえ学校の先生は忙しいわけですから、生徒

がどのようにこれを使いこなしていくのか。

それともう一つは、パソコンの中で、例えば有害情報をとってしまふ。このタブレットもそうなんです、そうした可能性を知ったのであれば、そこをどうブロックするかと。そういう「ネガティブチェック」、ここをしていけばいいのであって、あとは、子ども達がどうタブレットを使いこなすのかを見て「なるほど」と。で、良い点についてはどんどん横展開をさせていく、ここがポイントということで、既に「パソコン教育」という言葉、PCを教育現場に入れた時に、ある程度ここはでき上がった。で、今回は「それ以上に」とですね。というのは、パソコンの時は家にパソコンがなかったんです。だから、子ども達の中で、よっぽど関心のある子達は上手くなったんですけど、多くの子は先生と同じだったんですね。

ところが、今回は違うんです。つまり、タブレット型端末を何で子どもが喜んだか。実は「ゲーム」なんです。ゲームでいくらでもスーパーマリオでもそうですし、何でも今、やりまくっているわけです。その「もっといいやつが来た」と。「これで何でも知れる」と。もちろん、ゲームもやろうと思えばできるんですけどね。実は、子どもさん達が「自らやりたい」と思うものが目の前に来た。はっきり言って、自分の経験からも、学校の授業って、面白い時もあれば面白くない時もあるわけですね。「やりたくないけど、これ義務だからやらなきゃしょうがない」とか、「必修だから受けなきゃいけない」とか、そういった点があるんですけど、今回のタブレット端末はやりたい、欲しい。家で親に頼んでも買ってもらえない。それが何と「学校で貸してもらえる」と。「授業にも使えるんだな」と。だから、ゲームでもう使いこなしているんですね。その「よりレベルの高いもの」が与えられたということで、逆に言うと、ものすごく知的な好奇心、これを刺激をされて、「もっと勉強したい」という方向に、今度は逆になってくるんですね。

だから、こここのところの「メカニズム」というものを、もっともっと教育現場の皆さん方は、「児童生徒の立場だったらどうなるか」という、「いや、そんなの考えてますよ」と必ず言われるんですけどね。どうもこの「教えなければいけない。教育しなければいけない」と。これは、かつての自分として、生徒の時にね、学校現場のことを思い出して言っているわけなんです、大きく改善をして、子ども達の知的な好奇心をいかに引っ張り出してくる。そうした「面白い。学校行きたい」と。不登校の話もあったのは、「ある理由があって学校に行けない。でも勉強はしたい。で、それができる」と。先ほどから言われている「つながる」。だからずっとつながることによって、「学校にリアルで行かなくてもいいんだ」と。今までは行かないと、それは社会的に問題だった。家でも隠すと。そういった世界なんです、今では不登校でもわからないですよ。例えば大学だって、みんな今はオンラインでやるわけですから。だからそうした人達が、ご本人もそうだし、家庭の人達も「まずい隠さなきゃ」なんてことを思う必要はなくて、普通にもうやっつけられる。普通に学べる。やっぱりそうした環境がここにでき上がる。もちろんそれは「実際にリアルに行ってもいい」というね。

「しらさぎ中学校」も来年、全国初の県立ででき上がってくるわけなんです、そうした新しい時代が今まさに、学ぶ人が何の支障もなく、自由に自分の置かれた状況において学ぶことができる。そして、周りの人達も「何も気にしなくてもいいんだ」と。そこがまさに「ユニバーサル」であり、今回の「ダイバーシティ」につながるということです、ここは是非、学校の先生方に、一度もう経験をしている「パソコン教育」から、今度は「また次元が変わったものになる」ということ、この点を是非理解をしていただきたい。それが故に、私は総理に直接そこは言ったわけですね。それに対して、ここで内閣安倍総理に当時、琴線に触れたんでしょうね。そういったことで、ここでできないものができ上がったと。それによって、子ども達が本当に「パッと受け入れる」と。前のパソコンとはだいぶ違うんです、これは。ということを是非ご理解をいただければなど、そのように考えております。ありがとうございました。

それでは次に、小林委員さん、お願いいたします。

#### <小林委員>

小林です。よろしくお願いたします。前回の総合教育会議の中で、坂口弁護士から、「コロナが何を变えたか」というお話がありましたが、根本的には何も変わっていないという結論でした。「社会の不合理な仕組みを変えられる、コロナ禍というチャンスを活かせていない」ということだと思います。あれは7月でしたので、その後、飯泉知事は、国とわたり合い、県の組織をリードしていただいて、「GIGAスクール構想」をはじめ、様々な施策で徳島県の教育を大きく前進させてくれます。徳島県、そして日本は、この点に関して言えば、「コロナで変わった」と言えると思います。

しかし、運動部活動を中心とする学校スポーツの方には、何の変革もまだ感じられません。場当たりに大会を中止、延期したり、無観客開催にただけです。高体連も中体連も高野連も、それからスポーツ庁も、各スポーツ協会にしても、コロナを機会に大きな変革をしようと、大会そのものをこうしようとか、時期をずらそうとかいう動きがありません。今までどおりに、一箇所に集中して、密な状態で大会をさせようとしている状態も以前と同じです。

そういう中で、令和4年度に四国でインターハイが開催することが決まりました。開催時期に関しては、私は反対なのですが、決まったことは仕方がない。大会や試合があれば、勝つために努力工夫することが、徳島教育大綱にも取り上げられている「スポーツマンシップ」だと思います。「スポーツマンシップ」というのは、よく意味を取り違えられるのですが、「礼儀」とか「フェアプレー」だけではありません。一番最初に「勝つこと」が求められるんです。こういう言い方をすると勝利至上主義のように捉えられますが、そうではなくて「勝とうとすること」が大切なのです。そして、そのためにどうするか。例えば、どうやって暑さを克服するか、どういう練習をするか、どういう指導方法を行うかと、それはコーチの仕事ですが、そうい

うことが大事になってきます。ということで、「スポーツマンシップ」の一番の定義が「何とか勝とうとすること」ということになります。

ちょっと話がそれますが、ロシアでサッカーワールドカップがあった時に、日本が負けているのに、攻めずに自陣でボール回しをして、わざと負けて決勝トーナメントに行ったことがありました。あれは「スポーツマン失格」です。結果がどうなるだろうが、そのゲームは最後まで勝ちにいかなければならない。それがスポーツマンシップです。

ということで、実際に選手達は、どこでどんな大会があろうが、それに対して勝つための準備をします。暑かろうが寒かろうが、それに対して対応できるようにします。だから、その場を提供する、大人の責任がかなり大きくなってくるかと思えます。真夏の40度近いような中で野球をやらせたり、そこでインターハイを開催したりするというのは余りにも残酷でしょう。それに向かって選手は調整をするのですが、そういう場を提供するのは大人の仕事なので、我々大人が考えてやらなければならないと思います。

毎回こんなことを言っていますが、飯泉知事には、全国知事会会長として、「これはちょっと何とか考えたらどうや」ということを国の方にご提言いただけるようお願いしたいと思います。私からは以上です。

#### <飯泉知事>

ありがとうございます。確かにおっしゃるとおりですね。スポーツをはじめ、イベント全体として、このコロナ禍において、なかなかしくなってしまう。ってというのは、これも日本の国民性なんじゃないかな。何か一つ失敗をすると、みんなでたたいてしまう。「こんな無茶なことやるから、こんなことになるんじゃないか」ということですね。これ、私もスポーツというか、武道をずっとやってきた身ですから、今、小林委員さんの言うことはよくわかりますね。我々、中学校、高校の時に、柔道で何やるかって、畳を背負って階段をうさぎ跳び。今「そんなこと絶対やるな」と整形外科医は言うんですね。だから、その時に言われること、「そんなんやっていいんですかね、痛いし」って言ったら、「それは根性だ。根性を鍛えるんだ」って、根性だけで勝てたらね、そんな楽なことはないわけでした。しかし、ある程度は「頑張る」というね、それは確かにどんな困難な状況になっても、「あの時のことを考えれば、歯を食いしばってこんなもんはやれるよ」っていうね。今もってそれができるわけですので、悪いことばかりではないんですが、やっぱりもう少し「科学的にやっていく」といった点が重要で、どうもスポーツの世界では、それが足りないというのを今、小林委員さんがおっしゃっていただきました。

「勝つ」といった点でいえば、やはりスポーツマンシップとして、「コロナ禍にどう打ちかっていくのか」と、ここが今、一番大きなポイントで、そのためには、やはり求められるのは「チャレンジ精神」ですね。さっきワールドカップの話もあって、戦略的にはあれは評価をされたんですが、おかげで決勝トーナメントへ行くこ

とができた。しかし、あの試合が終わった時には世界中から大ブーイング。しかし、次の試合で見事善戦して、本当は勝てましたからね。最後やられちゃいましたけど。あの時には「すごい」と、こう言われたわけでして、もしその時に、世界の大ブーイングに耐える、そうした精神力がなくて、なまじ攻めこんでしまって、潔いけど負けてしまって、決勝トーナメントに行けなかったという、その後の決勝トーナメントでの、「日本って本当は強いんだね」という評価は二度と生まれていなかった。

だから、その時、その時の局面、局面で、少し日本人ていうのは、時期尚早に判断をし過ぎることがあるかと思えます。っていうのは今のコロナ禍、最前線でやってこれからの一番重要な局面を迎え、今日、またそれ以降、なかなか大変な状況に今からなって、またそれに対して、決断、決断、判断、判断をしていかなければならないわけなんですけど、それからいくと、やはりもう少し「長い目で見ろ」、特にこの教育の世界はそうなんです。長い目で見ろ」といったものを、もっともっと国民の皆さん方に、子どものうちから、大人になって「そうです」と教条的に言っただけで、「そんなこと言っただけで、先生」と言われてしまいますから、子どものうちから、もっといろんなことについては「今ここのみで判断する」ということではなくて、「ここでまずい一手かもしれないけど、場合によっては、これは将来性のある一手かもしれない」というのを、先生方が子どもさん達に言って、もっと「みんなで長い目で見ようよ」と。こうしたところがあれば、もっともっと今の日本、で、今おっしゃるそのスポーツ、とにかく、何かチャレンジをして失敗をするとたたきまわると。っていうのはこれ、日本の人事評価もそうなんです。特に「公務員の世界」。つまり、公務員の世界で一番出世するのは、「何もなくて、そして結果、失敗が起きなかった」、これが一番出世をする。二番目に出世するのは、「いろんなことにチャレンジして、全て成功させた」、これが二番目。そして三番目は、「何もなくて、結局、何か大きな局面にあって、落とし穴に入っちゃった、失敗しちゃった」、これが三番目。で、一番評価が低いのは、「チャレンジをして失敗した人」と。これではこの国の将来はない。ましてや、今のこのコロナ禍では絶対だめ。ということで、全国知事会でも、今、若い知事さん方も多いですから、そうしたことを常に彼らが言って、「無謀じゃないか、無理じゃないか」と。ベテラン知事が言うものも、「こんな良い面もあるじゃない」というところをもってつなげると。先ほど河口委員さんがおっしゃっていた全国知事会もつなげているところがあるわけなんですけど、こうしたところはあまり表に出ませんが。

ですから、やっぱり「スポーツの世界」、今のお話を受けて、やっぱり日本人そのもの、だから教育にも関するのかもしれない。一つのことでは「失敗をすると叩いてしまう」じゃなくて、「チャレンジをすることを褒めてあげる」と。そして、その成果であまり思わしくない、でも、それは長い目でみようと。もっとこういう部分を変えていければ、今、あらゆる面で、先進国の中で最下位と言われた日本。ここから浮上するには、もうこれしかない。今、日本に一番欠けているのは「チャレンジ精神」。これをもっともっと教育の子どもさんのうちから、そういう環境を、ま

たは理解をみんなで求める、そういう価値観になるといったところをやっていただければなど。今、全国知事会を率いて、つくづく思うことですね。前までは自分としては思っていたんですけどね。是非、今、小林委員さんがおっしゃっていただいた点、スポーツという事例でしたけど、この教育現場で、こうした点を打ち込んでいっていただきたいと思います。ありがとうございます。

ということで、各教委員さんからいただきましたので、あとは榊教育長さんにお任せいたします。

#### <榊教育長>

はい。今、教育委員さん、5名の方からいろんな意見をいただきました。本当にありがとうございます。

まず、三木委員さんからは、価値観についてのお話をいただきました。その中で、「ついていけない教員を、どうしたら同じ志で向かっていけるのか」とか、「知見も大事にしてほしい」というようなお話だったと思います。穴吹中学校でGIGAスクールのモデル校をしていますが、その中でお話を聞きますと、経験の豊富な年配の教員が、そんなに上手にパソコンは使えないけど、若手の教員に「こういう授業をしたいんだけど、どんなパソコンの使い方があるだろうか」というようなことをしっかり聞いて、「それだったら、こういうやり方がありますね」というように、若い教員に学んでいくことが出てきたと。まさに新しい知識、若い知識と、今までの授業をしてきた経験の「ハイブリッドの教育」というのが、今後のGIGAスクールの中で展開される可能性と思い、新しい発見でした。やっぱり教員もそれぞれ得意不得意がありますので、得意なところをしっかりと伸ばして、子どもに返していけるような、そういった学校になってほしいなと思いますし、そういう手助けをしていければなと思っています。

島委員さんからは、スライドありがとうございました。すごくわかりやすくご提案いただきました。特に、「教員育成」のことについてお話があったんですが、知事からもありました、やはり「魅力ある職場」、「働きやすい職場」、今、教員の働き方改革について、いろいろ議論いただいているところですが、やはり「教員が今、減っている」という現実の中で、「どうやったら、生きがいのある、魅力のある職場にしていけるか」というのをしっかりと発信していく必要があると思っています。11月議会では変形労働時間制の条例もお願いをして、先生方も多様な働き方を選んでいただける。そのためには、しっかり休んでいただけるように、夏休みの研修も一定期間なくして、先生方がしっかり休んで、活力を得て、次の二学期に子どもに向き合っていけるような状況をつくる、そういうことも今、取り組んでいるところです。今後も、ますます働き方改革を、加速していきたいと思っていますので、先ほどいただいたようなアイデアもどんどんいただけたらと思っています。

それから、菊池委員さんからは、「子どもたちの体力について、もう少し頑張らないかな」ということをいただきました。「小児肥満が多い」と、知事からもお話が

ありましたが、まさに「運動が苦手な子ども」というのが増えてきているのかなと。

「体を動かしたら、汗もかくし、ちょっと疲れるのでしんないな」と言う子どもがいるのですが、そうではなくて、「運動は楽しい」と、まずは「楽しく運動できる」ことを、教育委員会としては今まで進めてきたつもりだったのですが、まだ充分浸透してないところがあると思っています。「GIGAスクール」で、この間、高志小学校ばかりの話になるんですけども、体育の授業でもタブレットを使って、跳び箱やマットでの自分の姿を撮影して、「技術面でどうなんだ」とか、友達の様子を見て「これ上手いな」というようなことをやっていたと思います。私が聴覚支援学校の教頭の時に、特別支援学校の子どもは、その時からタブレットを使っていて、ちょうどマットの指導をしていたのですが、やはり見せた方がわかりやすい。即座に対応できるということで、「ここをもう少し手伸ばして」とか、「足をこう丸めて」というような指導をしていました。そういうような、「上手くなるための手段」としてもICTが使えるので、体力向上の部分とか、楽しく運動ができるような手段に、ICTも活用できるような方策というのを考えていければと思っています。

河口委員からは、いろいろなことを総合的にご提案いただきました。まず、「市町村間で授業の在り方に格差が出ないように」ということで、GIGAスクールについては、「GIGAスクール支援ホームページ」を作り、いろいろな情報をこれからも発信していく仕組みをとっております。やっぱり、良い取組みについては、双方向で発信ができたと思いますので、「教育委員会だけでこんなことができますよ」というのでなくて、「各学校からこんな取組みができた」ということも、ホームページにあげまして、全県下に、また全国に向けても発信できればというふうに思っていますので、「格差のない授業」というのものをしっかり指導していきたいと思っています。また、小・中・高・大の連携、地域との協力、高等学校も含めてなんですけど、「特色ある魅力ある学校づくり」というのを進めていく中で、そういうことを深めていけたらなと思っています。それから「不登校の子ども」についても、まさに「誰一人取り残さない教育」というのは、本当に必要だと思っています。「家庭と学校をつなぐだけでいいのか」という議論もありますので、不登校の子どもにどうやって学びを保障していくのかということとは、しっかり議論を深めていきたいと考えています。

最後、小林委員からは、「学校スポーツ」についてお話をいただきました。「勝つために努力する」というようなことも一つの道だと思うのですが、先ほども申しましたように、まず、子どもたちには、「生涯にわたってスポーツを楽しんでほしい」と考えています。知事からもありましたように、そのためにはやはり科学的にしっかり取り組む必要があると思います。昔の精神論でも、子どもたちを鍛えることができたと思うのですが、それにプラス「科学」という視点で見て、効果的に子どもの体と心を大事にしながら能力を上げていく。そして、上手くなっていくことで、子どもたちは、楽しくできると思いますので、まずは「勝つ」というのももちろん大事なんですけど、それは結果の話なので、「上手くなるように努力をしてほしい」



というふうに考えているところです。

あと、まとめになってないですけど、「GIGAスクール」、それから「少人数加配」知事会の強力なご提言で、教育委員会としても強力な武器をいただいたというふうに考えています。新しいものに食欲にチャレンジしながら、これまでの知見を生かしながら、しっかり教育に取り組んでいきたいと思えます。これからもたくさん様々な課題が出てくると思えます。ソフト面については、しっかり教育委員さんの力を借りながら、それから、お金のかかるものについては、全国知事会長の飯泉知事のお力も借りながら、整備もしていき、子どもたちが本当に学校で「良かったな」と思えるような教育を進めていきたいと思えます。本日はどうもありがとうございました。

### <飯泉知事>

ありがとうございました。今日、それぞれの委員の皆様方からいただいた点は、まさに本質の点ばかりだったと思えます。そうした中で、先ほど小林委員さんから、坂口元委員さんのお話を引用されて言われました、このコロナ禍、一体どうすればいいのか、世界中が問われているんですね。まさに、これまでの価値観が全く通用しない。また、チャレンジ精神が旺盛なところ、逆に守り、こちらに一徹なところと、様々な国民性がある中で、どこが生き残れるのか。まさに人類として、種として生き残れるかどうか。何せ、これと比べられるのは14世紀のペストと。でもあれはヨーロッパだけだったんですね。でも今回は世界中でということになりますので。

今回、教育の世界では「新しい時代の教育環境の整備」というものが、なんと令和3年度の文教関係予算の筆頭に書かれた。その具体的な事例が二つ。先ほどの加配という形でこれまで行っていた35人以下学級を、40年ぶりの教職員定数を改定をして、学校の先生を増やすという形で、じゃあ、さあこれをどう活用していくのか。

もう一つはGIGAスクール。まだ、公立の国公立の義務教育ということになっているわけですが、徳島はそうした中で、日本のモデルとなる高等学校、あるいは特別支援学校高等部、公私を問わずとなっているところでもありますので、今後、日本の他をリードした、でもこれは世界をリードしたわけではなくて、世界では標準なんですね。これをどう駆使をしていくのか。

この二つ、新しい時代をどう生き抜けるか。やはり何と言っても一番重要なのは「教育」ということになりますので、昨日も萩生田大臣とは「どうしてこの国は教育に金をかけないんだろうか」と、文科大臣として本当にそのことを何度も何度も彼は言ったんですけどね。「まあでも今回こうやってできたじゃないですか」ということも申し上げて、今後どうこれを戦略的に活用していくのか。そこがこれによって浮いていく加配を「本当の意味での加配」にしていくと、ここのところの知恵ということにもなりますので、是非、皆様方におかれましては、これからもまずは徳島の

教育、そして徳島の教育が日本の教育のモデルに。そしてこれからはまさに世界の教育の中でどういう位置付け、モデルになるのか、こういう点に思いを馳せて、これからも活動をよろしくお願いを申し上げたいと存じます。

本日はどうもありがとうございました。

**<佐々木副部長>**

ありがとうございました。以上をもちまして、令和2年度第2回「徳島県総合教育会議」を閉会いたします。本日はどうもありがとうございました。

**以上**